法華寺の三「嶋」院

宮崎健司

法華寺は、藤原不比等の旧宅で光明子に伝領され「皇后宮」となり、天平十七年に「宮寺」に、同二十年頃には「法華寺」となった。法華寺は光明子の活動の拠点と目され、尼寺であるが皇后宮官人の関与が見られ紫微中台となってからもそれは継続した。ところで正倉院文書には「嶋院」「中嶋院」「外嶋院」という三院が見え、佐久間竜氏はそれらが別個に法華寺の中にあったと指摘されたが、実は先の官人関与は特にこの三「嶋」院に集中する。聖武の死後光明子は政治上も皇室の実力者として行動し、藤原仲麻呂政権の背景には彼女が存在したが、これらをふまえるなら法華寺及び三「嶋」院は単に寺院としての機能のみではなく、その政治的機能が注目される。これらを検討する際その構造を確認しておく必要があるが、栄原永遠男氏や岸俊男氏は先の佐久間説に疑問をもたれている。そこで佐久間説を検討し法華寺の三院について考えてみたい。

佐久間氏は天平勝宝八歳の図書寮経散帳や経疏帙籤等奉請帳に三「嶋」院が並記してあることから先の見解を示された。佐久間説の根拠となる史料は当時造東大寺司に管理されていた図書寮経及び台一切経に関する造東大寺司の経散帳であった。その記載様式は、

　注維摩経一部六巻
　　右、依上毛野判官七歳九月廿日判、令請市原王所付秦家主

とほぼ統一的であるが、一部は経典の請求文書や送り状そのものと思われる嶋院牒や造東大寺司牒など実際の文書を書写したごとくであり、両史料で同一の場所を違った名称で記載する可能性があり、佐久間氏の見解は十分な根拠を持ち得ないのである。

さて岸俊男氏によれば、「嶋」とは庭園を指し庭園に池を造って中に嶋を設ける造園方法が特に珍奇なものと注目されて「シマ」と呼ばれたらしい。そして、三院が「嶋」の名を持つのは不比等邸の庭園である『「嶋」のある一院に由来する』ものといえる。

三院の史料でいち早く現れるのは「嶋」と「中嶋」で法華寺となる以前からみえる。栄原永遠男氏は初期写経所の研究の中で「嶋」＝「中嶋」であると結論された様に、「嶋」が嶋のある一院を指すのに対して「中嶋」は池に設けられた中嶋による呼称と考えられ、両者は同一地域といえよう。次に「外嶋院」と「嶋院」の関係について岸氏は、天平宝字二年の写経事業の決算報告書に嶋院から支給された写経用紙を外嶋院に返却していることから「嶋院と外嶋院はここでは同所を意味するかも知れ」ないとし、「嶋院の名称が中嶋院と外嶋院を総括するものであったかも知れない」と述べられる。このように栄原・岸両氏の分析からすると「嶋院」＝「中嶋院」＝「外嶋院」ということになってしまう。そこで三院の名称に着目すると、少なくとも「中嶋院」と「外嶋院」は「中」と「外」という異空間に依拠する呼称で同所を意味するとは考えがたく、岸氏の指摘の如く「嶋院」が「中嶋院」と「外嶋院」の総称と見るべきであろう。

外嶋院の存在は天平勝宝四年から天平宝字二年と三院の中で確認できる期間が最も短い。佐久間氏は慈訓が天平勝宝三年以降法華寺に入寺し華厳講師として「外嶋院」に居住したとされるが、

慈訓の法華寺入寺のために建立されたのが「外嶋院」ではなかったか。つまり華厳講師慈訓の居住した「外嶋院」とは、写経活動において華厳経のみが書写された様に法華寺における華厳教学の中心として新たに建立された一院であったと考えられる。そこで外嶋院の建立によって新設の院を既設の院と区別するため、以前の「嶋院」＝「中嶋院」を「中嶋院」として新設の「外嶋院」と区別し、総称として「嶋院」が使用されたと考える。「中嶋院」「外嶋院」の名がみえなくなると「嶋院」の名称しかみられなくなるのは、天平宝字二・三年頃に「中嶋」「外嶋院」を区別して呼ぶ必要がなくなり、「嶋院」に統一されて呼ばれたためであろう。それは「中嶋院」或いは「外嶋院」が、改称されたか、廃院となったのであろう。

年次未詳の断簡文書には「中嶋院」に観音像が、「外嶋院」に毘盧舎那仏が安置されたことが知られるが、外嶋院に『華厳経』『梵網経』の本尊である毘盧舎那仏が安置されたのは「外嶋院」が法華寺における華厳教学の中心であったためであろう。さらに天平宝字二年の写経で『千手千眼経』『新羂索経』という観音経典の多くが「中嶋院」に奉請されたのは、「中嶋院」が観音像を安置していたことと関連すると思われる。

さて岸俊男氏は早く史料から見えなくなる「中嶋院」が光明皇太后周忌の斎会のために法華寺西南隅に建立された阿弥陀浄土院の前身ではないかとされるが、史料から姿を消した点では「外嶋院」もその対象となりうる。阿弥陀浄土院について井上光貞氏は、皇太后崩御後に阿弥陀浄土にふさわしい荘厳の工事がなされたとされ、浄土院の規模が唐招提寺の金堂に類似することより当初本堂が同じく毘盧舎那仏を本尊として計画され、崩御により追善の堂舎である阿弥陀堂となったとされている。そうすると法華寺の西南隅に建立された阿弥陀浄土院の前身としては法華寺における華厳教学の中心たる「外嶋院」こそがふさわしいのである。

光明皇太后の崩御後、彼女の発願した盧舎那仏を本尊とする堂舎は奇しくも彼女自身の追善の堂舎となったわけであるが、この変更に関連して興味深いのは、天平勝宝六年閏十月十九日付外嶋院牒である。それは外嶋院が造東大寺司に対して鑑真進上の阿弥陀浄土図を請求した文書である。光明皇太后の発願した盧舎那仏を本尊とする堂舎は「外嶋院」に建立されたが、そこを活動の主体とした慈訓が阿弥陀浄土院に関係深い阿弥陀浄土図を天平勝宝六年の段階で見ていたとすると、慈訓が皇太后崩御後建立しつつある堂舎を追善の阿弥陀堂に計画変更するのに一役かっていたのかもしれない。

法華寺に皇后宮時代の光明子が居住したのは勿論であるが、皇后宮職もそこを活動の場としたと思われる。天平十七年に皇后宮は宮寺となったのだが、三院に関する諸文書に責任者として多く紫微中台官人が署名することは、彼らが三院と深い関係を有したことの証左といえる。彼らの職務が光明子に奉仕することであることからすると、光明子も法華寺内に依然としていたのではないだろうか。少なくとも阿弥陀浄土院跡から出土した木簡より光明子が天平宝字四年・五年頃に法華寺にいた可能性が強い。もし政治的発言力を拡大させていた彼女が以前として法華寺に居住したならそこは彼女の政治的拠点であったといえる。